埼玉純真短期大学研究論文集　第 15 号　PP.67-80

大学生のオンライン国際交流プログラムについて:

―日本とインドネシアの学生の比較―

Online International Exchange Program for College Students: Comparison of Japanese and Indonesian Students

鈴木一代 *　Betty Debora Aritonang**　藤田利久 ***

要旨　本稿の目的は，日本（ゲスト）とインドネシア（ホスト）とのオンライン国際交流プログラムが両国の大学生に及ぼす影響を探索的に明らかにすることである。参加者は、日本人大学生 5 人，インドネシア人大学生 11 人の合計 16 人であり、交流前と交流後にアンケート調査を実施した。その結果，（1）オンライン国際交流は，参加者（ゲスト）である日本の学生だけではなく，ホスト国（インドネシア）の学生にも影響を及ぼすが，日本人学生への影響がより大きいこと、（2）オンライン国際交流は，対面の国際交流プログラムと同等の成果を大学生に提供できることが示唆された。また，オンライン国際交流をより円滑に進めるための留意点が示された。

【キーワード：オンライン国際交流　プログラムの効果　大学生　日本　インドネシア】
【Keywords: Online international exchange, effects of the program, college students, Japan, Indonesia】

I.　はじめに

昨年 (2020 年) からの新型コロナウィルス（Covid-19）の感染拡大に伴い，世界中の人々の日常生活が大きく変化している。特に，オンライン通信の活用があらゆる分野で急速に広がっており，教育分野も例外ではない。教育機関，特に大学等においては，対面授業をオンライン授業に切り替え，教育活動をおこなっている場合も少なくない。オンライン授業の導入は始まってから間もなく，まだ手探りの状態である。教員もオンライン授業の実施に精通しているとは言いがたく，学生のネットワーク環境の不備なども指摘されているが，オンライン授業への肯定的な評価もある（U.S. Department of education，2010）[1]。また，オンライン授業は，どこからでも参加できるので，（通学）時間の節約や多様なゲスト講師の招聘等が可能であるなどの利点もあり，ICT (Information and Communication Technology：情報通信技術）を効果的に活用すれば，教育活動の可能性が無限に広がると考えられる。

大学間の国際交流（活動）に目を向けると，コロナ渦の影響で中止になるところもあれば，オンライン交流に切り替えて実施する大学もある。オンライン交流については，たとえば，森山・白田 (2010)[2] は，オンライン国際交流は「個の文化」の理解の入り口となり，たとえ現地に行けなくても生の交流を通して，「コミュニケーションに介在する文化」を学ぶ機会になることに言及している。また，Thorne (2010)[3]は，オンライン国際交流の意義として，学習者による主体的な意味交渉，特に語用論の面における言語発達や自文化への気づきの機会であることなどをあげている。さらに，関・大瀬 (2021)[4]は，オンライン活動（交流）では，「参加学生は理路整然と発言するスキルを向上させているように感じられる」（p.133）と述べている。加えて，オンライン交流は，従来型の国際交流を妨げる要因の一つである，学生の費用（旅費等）への不安（三原・他，2017）[5]を大幅に軽減でき，参加を容易にする利点もあると考えられる。

ところで，これまでの従来型の短期海外研修の

＊　埼玉純真短期大学 こども学科　講師
＊＊　マハサラスワティ大学　講師
＊＊＊　埼玉純真短期大学 こども学科　教授

成果に関する調査は，林・鈴木 (2017)[6]，加藤 (2020)[7]，三原・他（2017)[5]，鈴木・林（2014)[8]，鈴木・他（2020)[9]など，多数存在するが，その多くが，短期海外研修が，学習意欲（言語的側面を含む）の向上や異文化への理解の促進などに有用であり，学生に肯定的な影響を及ぼすことを指摘している。そのなかでも，鈴木・他（2020)[9]は，インドネシアでの短期海外研修に参加した日本人学生 32 人を対象に，短期海外研修の効果や学生の意識変化を把握するためにアンケート調査を実施し，その結果，1) ホスト国の人についてより肯定的なイメージをもつ傾向，２）短期海外研修に参加したことによる，自分自身や日本人についての見方の変化への自覚（気づき）を明らかにしている。上述は，インドネシアで実際におこなわれた海外交流についての研究結果であるが，他方，コロナ渦で，実際の交流に変わって着目され始めたオンラインによる短期間の海外交流に関しては，学生に及ぼす影響等の研究はほとんどなく，オンライン海外交流の効果については明らかになっていない。そこで，本稿では，鈴木・他 (2020)[9]の短期海外研修についての研究成果を踏まえたうえで，パイロット・スタディとして，インドネシアの M 大学（以下：M 大）と日本の S 短期大学（以下：S 短大）が 2020 年度に実施したオンライン国際交流を取り上げ，オンライン国際交流プログラムが学生に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。その際，ゲスト側の日本の学生だけではなく，ホスト側のインドネシアの学生も視野に入れ，両者を比較検討する。また，今後のオンライン海外交流を効果的に進めるために必要と思われる事柄についても考察する。

なお，M 大と S 短大は，2016 年から国際交流を始め，2017 年には大学間協定を締結している。その後，毎年 1 回（2 月か 3 月），1 週間程度，S 短大の学生がホスト校である M 大学を訪問し，学生との文化交流や施設見学などの短期海外研修を通して両者の関係を深めてきた。しかし，2020 年度は，コロナ渦のため，現地での海外研修は中止になり，オンラインによって国際交流活動をおこなった。M 大はインドネシア・バリ島のデンパサール市に位置し，バリ島に古くから存在する S 教育財団傘下の私立大学である。バリ島は，世界的に有名な観光地の一つであるため，高い外国語能力をもつ人材の需要度が高い。1990 年に入ると，日本航空が東京―デンパサール間の直行便の運航を開始したこともあり，日本におけるバリ島の人気は上昇し，日本人観光客が著しく増加した。そのような状況のなか，M 大は，1993 年にバリ島初の日本語学科を開設した。2014 年からは，日本の大学との交流が始まり，春休みや夏休みに日本人学生のフィールドワークや短期研修を積極的に受け入れてきた。他方，S 短大は，埼玉県北東部，東京都心から約 60Km に位置し，保育士・幼稚園教諭の養成を目指す専門学科（子ども学科）を有する私立の短期大学である。近年，保育園や幼稚園においても，外国にルーツをもつ子どもたちが増加傾向にあることから，異文化理解や自文化（日本文化）理解に関する教育に力を入れており，語学だけではなく，「異文化理解」や「ふるさと学」等の授業を開講している。

II. 方法

1．オンライン国際交流プログラムの概要・作成・進行について

1）概要

オンライン国際交流は，S 短大の「異文化理解」および M 大の日本語学科 3 年（前期生）の「N3-JLP 対策」の授業の一環として実施された。「異文化理解」は，全 15 回（各 90 分）の授業で，異文化理解の基礎理論，バリ短期研修の事前準備（宗教，生活，文化，インドネシア語の日常会話など），バリ短期研修からなる。「N3-JLPT 対策」は，毎年 12 月に実施される日本語能力試験（Japanese Language Proficiency Test - JLPT）N３の受験準備，特に「文字・語彙・文法」の試験対策のための授業である。新型コロナウィルス感染拡大の影響で，2020 年度は，JLPT 試験は中止され，S 短大のバリ短期研修も不可能になったため，各授業内容の一部をオンライン海外交流に変更した。

それぞれの授業の担当者であるインドネシア人 M 教員と日本人 S 教員が，オンラインによる全３回の話し合いによって，ZOOM によるオンライン国際交流の概要（回数，日程，時間，内容など）を決定した。これまでの短期海外研修では，M 大と S 短大の関係は，M 大が学生を受け入れるホス

ト，S 短大の学生はインドネシアを訪問するゲストだったことから，オンライン国際交流においても，受け入れ側である M 大の授業「N3-JLPT」の受講生のインドネシア人学生が，M 教員の指導の下，プログラムを作成し，S 短大の学生はそれに参加することになった。

表 1 は，オンライン国際交流の概要を示している。オンライン国際交流は，2020 年 11 月から 12 月にかけて全 5 回，1 から 3 週間の間隔で，基本的に金曜日の日本時間 16:00-17:30（バリ時間 15:00-16:30）の各 90 分で実施されたが，実際には，10 分から 45 分程度延長されることが多かった。また，第 5 回目（最終回）には，学生の強い希望により，90 分の授業後に学生だけで自由に会話ができる機会を設けた。オンライン国際交流の参加者は，M 大日本語学科 3 年生のインドネシア人学生 20 人（男性 12 人，女性 8 人；20 歳から 22 歳）と S 短大の「異文化理解」の受講生 5 人（女性，19 歳から 20 歳）であるが，各回によって参加者には多少変動があった。M 大で海外渡航経験のある学生は 3 人，日本 (1 カ月) が 1 人，日本 (2 年) が 1 人，日本とシンガポール (3 週間) が 1 人，S 短大の場合は，台湾およびグアムへの観光旅行（各数日）体験があった 1 人のみである。なお，オンライン海外交流には，両大学の担当教員も参加した。

表 1　S 短大と M 大学のオンラインによる国際交流の概要

回	日時	テーマ（発表方法）	日本参加者数	インドネシア参加者数
1	2020 年 11 月 13 日（金） 16:00-17:30	• 参加者各自の簡単な自己紹介 • インドネシアとバリの全般的な紹介 (PPT) • バリの大学生生活について (PPT)	4 人	20 人
2	2020 年 11 月 20 日（金） 16:00-17:30（～17:45）	バリの観光地 (ビデオ 2 本)	5 人	19 人
3	2020 年 12 月 4 日（金） 16:00-17:30 (～18:45)	バリ料理 (ビデオ 2 本)	5 人	20 人
4	2020 年 12 月 11 日（金） 16:00-17:30 (～17:40)	バリ芸能 (ビデオ 2 本)	4 人	18 人
5	2020 年 12 月 18 日（金） 16:00-17:30 (+自由時間)	バリでの流行（PPT）	4 人	20 人

2）プログラム内容と作成

プログラムの内容（テーマ）は，両大学の学生が興味をもて，かつ話しやすいことに配慮して決定された。JLPT-N3 の準備授業を言語運用体験（言語を用いて実際に情報交換すること：具体的には，日本語を使ってのコミュニケーション）に切り替え，受講生全員に日本語での発表を体験させるために，20 人の学生を 1 グループ 4 人で 5 グループに分けた。グループ内の 4 人のメンバーは，それぞれ，全体の統括，担当教員との連絡，発表原稿作成，発表資料作成等のいずれかの役割の責任者になった。各グループが，全 5 回のプログラム日程の 1 回ずつを担当し，割り当てられたテーマに沿って，二人一組でパワーポイント（PPT）かビデオによる約 15 分の発表資料 2 種類，および発表原稿を作成した。各グループのメンバーおよびテーマは担当教員が決定したが，サブテーマや発表資料のコンセプトなどは，グループ内で学生が自由に話し合って決めた。また，各グループは，発表後に日本人学生にする質問項目等も考案した。

各回の具体的な内容は，次のようになる。

第 1 回目は，「バリの大学生生活」と「インドネシアとバリの全般的紹介」，第 2 回目は，「バリの観光地の紹介」で，２つのビデオによる発表がされた（世界文化遺産として登録された棚田のジャティルウィー [JATILUWIH]），内陸部の有名観光地ウブドのサラスワティ寺院）。第 3 回目は，

「バリ料理」で，「スロンボタン」というバリの野菜系のロカルフードと「ピサン・ゴレン」というバリでよく知られたおやつが紹介された。第4回目は，「バリ芸能」であり，「ガムラン音楽」と「リンディク」という楽器が扱われた。第5回目（最終回）は，「バリでの流行」で，若者の間で人気のデートスポットやレストラン，若い女性の流行ファッション，ブームになっているKPOPやその影響による韓国語の簡単な挨拶や歌，さらに，若者の間で流行っているゲーム，韓国ドラマ，アプリなどが取り上げられた。

3）プロブラムの進行

各回の交流は，原則として日本語で実施され，主に担当グループが進行をおこなった。1回の流れは，基本的に，挨拶で始まり，M大の発表者（学生）の紹介，テーマに関する二つの発表，発表テーマについての質疑応答だった。なお，初回（第1回目）においては，教員の簡単な自己紹介，次に，インドネシア人の学生，日本人の学生の順での自己紹介（各自1分程度），写真撮影がおこなわれ，最終回（第5回目）には，日本人学生，インドネシア学生の順で，今回のオンライン交流についての感想が述べられた。

質疑応答は，双方の学生によるものだが，両者の意思疎通が難しそうな場合には，ZOOMのチャット機能等を利用し，各担当教員が説明を付け加えるなどの支援をおこなった。M大学生の日本語でのコミュニケーション能力には程度の差があったが，状況に応じて，日本語コミュニケーション能力の高い学生が通訳をした。S短大の学生は，挨拶程度のインドネシア語しか習得していなかった。また，M大の学生はオンライン授業の経験が豊富だったが，S短大の学生は未経験だったため，交流前に，ZOOMのダウンロード，使い方などについての事前授業をおこなった。両教員間では，ZOOMや機材等の事前テストを行い，オンライン交流に備えた。なお，インドネシア側は，各自，自宅等からの参加だったが，日本側は，S短大の教室において実施した。

2．アンケート調査

全5回のオンライン国際交流が，学生にどのような変化をもたすかを把握するため，オンライン交流を開始する前（事前調査）と交流終了後（事後調査委）にアンケート調査を実施した。

1）調査参加者

アンケート調査（全2回）への参加者は両大学の学生25人(男性12人，女性13人)だったが，M大の参加者のうち，どちらか一回しか参加できなかった学生を除くと，全体で参加者は16人（男5人，女性11人）だった。内訳は，M大11人（男性5人，女性6人，20歳から22歳），S短大は5人（女性，19から20歳）である。なお，M大の学生は全員インドネシア人（ただし，バリ人以外も含まれる），S短大の学生は全員日本人だった。

2）日時・場所

オンライン国際交流は2020年11月から12月にかけて全5回実施されたが，アンケート調査は，第1回目の交流を開始する直前と，第5回目終了直後に実施された。日本の場合は，S短大の教室で，所要時間は10分から15分程度だったが，インドネシアの場合は，各自google formを用いて自宅で回答した。

3）調査方法

オンライン交流の前の事前調査と交流終了後の事後調査の2種類のアンケート調査を実施した（「アンケート1（日本人学生用）」および「アンケート2（日本人学生用2）」参照)。各アンケート調査は，それぞれ調査参加者の属性および調査項目からなる。調査項目については，先行研究を参照した上で，鈴木・他（2020)[9]が，実際の短期海外研修用に，短期海外交流が学生に及ぼす影響を把握するために作成した事前・事後のアンケート調査項目を基盤に，その一部をオンライン短期海外交流に適合するように加筆・修正して用いた。各調査項目は，3件法か5件法，あるいは，自由記述による回答からなる。事前調査は全5項目で，海外での活躍希望（質問1），相手国の人のイメージ（質問2），相手国文化への興味（質問3），オンライン交流への期待(質問4)とその具体的な内容（質問5），事後調査は，全10項目で，研修への期待（質問4）を除く事前調査の質問項目（質問1から3）に加え，自身の変化（質問4），自国/自国人の見方の変化（質問5），オンライン交流の評価に関する項目（4項目：質問6から質問9），オンライン交流についての感想（質問10）だった。日本人学生用の日本

語のアンケートとインドネシア人学生用のインドネシア語のアンケートの内容は基本的に同一だが，自国や相手国について尋ねる際には，国名を変更した。両言語のアンケートはバックトランスレーションによって作成された。なお，上記のアンケートのほか，インドネシア人学生は，オンライン交流活動終了直後に，記述方式で感想等を提出した。また，日本人学生の場合には，授業の終了後，毎回，簡単な感想を提出してもらうと同時に，「オンライン研修で印象に残ったこと」というテーマでレポートを提出してもらった。なお，オンライン交流における学生間の質疑応答などは学生の承諾を得た上で録画した。本稿では，アンケート調査結果を中心に扱う。

4）手続き

①アンケート調査の実施にあたっては，インドネシア人学生の場合には，google form を用い，各自に回答してもらった。日本人学生には，授業内で，アンケート用紙を配布し，その場で記入してもらい，回収した（第５回目に欠席した１人については，参加者のひとりからアンケート用紙を渡してもらい，次週の授業の際に回収した）。

②倫理的配慮について：調査参加者には，調査目的および守秘義務について十分に説明し，同意を得たうえで調査を実施した。また，個人情報の取り扱いについては，個人が特定されないように十分留意し，全体として集計した。

5）分析

回収したアンケート調査は，事前，事後のそれぞれで整理し，事前・事後とも同一の質問に関しては，両者を比較検討した。また，日本の学生とインドネシアの学生の比較を行った。その際，調査参加者の人数が少ないため，人数および割合（パーセント）の記述のみとし，傾向の把握にとどめた。また，必要に応じてオンライン国際交流の実際の様子を録画した映像（学生同士の質疑応答の全体の様子、学生の発言およびそれに対する反応など）も参照した。なお、インドネシア人学生用のアンケート調査結果は，筆者のひとりであるインドネシア人教員によって日本語に翻訳された。

III. 結果

まず，日本人学生とインドネシア人学生のそれぞれについて，オンライン国際交流の前後の違いを把握するために，前後同質問項目（質問１から質問３）を中心に結果を提示し，質問４および質問５についても触れる。次に，オンライン交流後の調査結果について，日本とインドネシアの学生を比較して提示する。質問項目については，各国の学生の状況に適合するように内容に影響を及ぼさない範囲で表現を変更している箇所は，スラッシュ（例：日本人学生 / インドネシア人学生）で示している。

1．日本の大学生におけるオンライン国際交流の事前と事後の比較

表２は，質問１から質問３について，事前調査（以下，事前）および事後調査（以下，事後）の結果の対比である。

質問１「将来海外で活躍したいと思いますか」については，事前では，「どちらでもない」が４人（80.0％）で，「いいえ」は１人（20.0％），「はい」と答えた人はいなかったが，事後では，「はい」が２人（40.0%），「どちらでもない」が２人（40.0%），「いいえ」が１人（20.0%）だった。事前で「どちらでもない」と回答した４人のうちの２人が，事後には，「はい」に移行していた。質問２「インドネシア人についてどう思いますか」の回答は，事前は，「ややよい」が２人(40.4％)，「どちらでもない」が３人（60.0％）だったが，事後には，全５人が「よい」だった。質問３「インドネシア（バリ）文化について興味ありますか」に対しては，事前では，２人（40.0％）が「ややある」，３人（60.0％）が「普通」と回答したが，事後には，全５人が「ある」だった。

なお，事前のみの質問である「バリ研修についてあなたは期待していますか」（質問４）とその具体的内容（質問５）については，「期待している」が４人（80.9％），「どらでもない」が１人（20.0％）だった。４人（80.0％）が具体的な内容をあげており，「友達づくりに関する事柄」（「交友関係を広げる」や「交流を深める」），「日本とバリの相違点が知りたい。バリの文化や食文化を聞いてみたい」，「楽しそう」だった。

表２　日本の大学生における事前・事後の比較

No.	質問（事前）	研修前後	回答				
1	将来海外で活躍したいと思いますか		はい	どちらでもない		いいえ	
		前	0 人（0.0%）	4 人（80.0%）		1 人（20.0%）	
		後	2 人(40.0%)	2 人（40.0%）		1 人（20.0%）	
2	インドネシア人についてどう思いますか		よい	やや良い	どちらでもない	やや悪い	悪い
		前	0 人（0.0%）	2 人(40.0%)	3 人(60.0%)	0 人（0.0%）	0 人（0.0%）
		後	5 人(100.0%)	0 人（0.0%）	0 人（0.0%）	0 人（0.0%）	0 人（0.0%）
3	インドネシア（バリ）文化について興味ありますか		ある	ややある	普通	ややない	ない
		前	0 人（0.0%）	2 人（40.0%）	3 人(60.0%)	0 人（0.0%）	0 人（0.0%）
		後	5 人(100.0%)	0 人（0.0%）	0 人（0.0%）	0 人（0.0%）	0 人（0.0%）

２．インドネシアの大学生におけるオンライン国際交流の事前と事後の比較

表３は，インドネシアの学生に対する質問１から質問３について，事前調査および事後調査の結果を対比して示したものである。

質問１「将来日本で活躍したいと思いますか」については，事前では，「はい」が８人（72.7%），「いいえ」が２人（18.2%），「どちらでもない」が１人（9.1%），事後では，「はい」が９人（81.8%），「どちらでもない」と「いいえ」が各１人（9.1%）だった。事前で「いいえ」と回答した２人が，事後には，「はい」に移行したが，「どちらでもない」の一人は「いいえ」と回答した。質問２「日本人についてどう思いますか」という問いには，事前では，「よい」が６人(54.5%)，「ややよい」が５人(45.5%)，「どちらでもない」「やや悪い」「「悪い」はいなかった。事後には，「よい」が６人(54.5%)，「ややよい」が４人(36.4%)，「どちらでもない」がひとりで，事前には「ややよい」と回答した４人のうちの一人が，「どちらでもない」に移動した。質問３「日本文化について興味ありますか」に対して，事前では，「ある」が６人(54.5%)，「ややある」が４人(36.4.5%)，「普通」１人(9.1%)，事後では，「ある」が８人(72.7%)，「ややある」が２人(18.2%)，「普通」が１人だった。事前で，「ややある」と「普通」と回答した５人全員が，事後には「ある」に移行したが，事前で「ある」と回答したうちの一人は「普通」を選択した。なお，質問１から質問３の回答で，否定的な回答へ移動したのは特定の一人だった。

表３　インドネシアの大学生における事前・事後の比較

No.	質問	研修前後	回答				
1	将来日本で活躍したいと思いますか？		はい	どちらでもない		いいえ	
		前	8 人（72.7%）	1 人（9.1%）		2 人(18.2%)	
		後	9 人（81.8%）	1 人（9.1%）		1 人（9.1%）	
2	日本人についてどう思いますか？		よい	やや良い	どちらでもない	やや悪い	悪い
		前	6 人（54.5%）	5 人（45.5%）	0 人（0.0%）	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)
		後	6 人（54.5%）	4 人（36.4%）	1 人（9.1%）	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)
3	日本文化について興味はありますか？		ある	ややある	普通	あまりない	ない
		前	6 人（54.5%）	4 人（36.4%）	1 人（9.1%）	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)
		後	8 人（72.7%）	2 人（18.2%）	1 人（9.1%）	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)

事前のみの質問４「オンライン交流についてあなたは期待していますか」に関しては，「期待している」が９人（81.8%），「少し期待している」は０人，「どらでもない」が１人（9.1%），「あまり期待していない」が１人（9.1%），「期待していない」は０人だった。その具体的な内容（質問

5）については 11 人のうち 10 人があげている（複数回答）が，「日本語に関する事柄」（「日本語でうまく話せること」，「日本語で話す練習にしておきたい」，「日本人と話す自信を身につけたいです」など）が 4 人，「友達づくりや交流への期待 」(「日本人の友だちを作りたい」「日本人と交流できること」など」) が 3 人，「視野を広げたい」が 2 人，そのほか（「新しい経験ができること」「自分に役に立てること」）が 2 人だった。

3．事後調査項目についての日本とインドネシアの大学生の比較

ここでは，オンライン国際交流後の事後調査項目（質問 4 から質問 10）の結果について，日本人学生とインドネシア学生を比較して提示する。表 4 は，選択肢による質問（質問 4 から質問 6，質問 9）の回答を示している。

表 4　事後調査項目についての日本とインドネシアの大学生の比較

No.	質問	学生の国	回答				
4	オンライン交流に参加したことによって貴方自身に変化がありましたか。		はい		どちらでもない	いいえ	
		日本	5 人(100.0%)		0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)	
		インドネシア	7 人 (64.6%)		4 人(36.4%)	0 人 (0.0%)	
5	オンライン研修に参加して日本それから日本人についての見方が変わりましたか。		はい		どちらでもない	いいえ	
		日本	4 人 (80.0%)		1 人(20.0%)	0 人(0.0%)	
		インドネシア	6 人 (54.5%)		5 人(45.5%)	0 人(0.0%)	
6	M 大学の受け入れ体制についてどう思いますか。		よい	ややよい	どちらでもない	やや悪い	悪い
		日本	5 人(100.0%)	0 人 (0.0%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)
		インドネシア	7 人 (64.6%)	4 人(36.4%)	0 人 (0.0%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)
9	オンライン交流会に積極的に参加したと思いますか		はい		どちらでもない	いいえ	無回答
		日本	4 人(80.0%)		1 人 (20.0%)	0 人(0.0%)	―
		インドネシア	4 人(36.4%)		5 人 (45.5%)	1 人(9.1%)	1 人(9.1%)

質問 4「オンライン交流に参加したことによって貴方自身に変化がありましたか」には，日本人学生の全 5 人が「はい」と回答しているの対し，インドネシア人学生の場合は，「はい」という回答は 7 人 (64.6％) だった。「何が変わったか」という質問（自由記述）の回答は，日本人学生の場合は，インドネシア（バリ）やバリ人へのイメージの肯定的な変化（肯定感）だったが，インドネシア人学生の場合は，「日本語の学習・習得に関すること」（6 人），「日本の大学や文化についての知識と理解の増大」（2 人）だった。質問 5「オンライン研修に参加して日本 / インドネシアそれから日本人 / インドネシア人（バリ人）についての見方が変わりましたか」については，日本人学生の場合は，「はい」が 4 人（80.0％）だったが，インドネシア人学生の場合は，「はい」が 6 人（54.5％）だった。

質問 6 以降のオンライン国際交流に関する評価・感想については，質問 6 の「M 大学の受け入れ体制についてどう思いますか」の回答は，日本人学生の場合は，全員が「よい」，インドネシア人学生の場合は，「よい」と「ややよい」を合計すると 7 人（64.6％）だった。日本人学生の「よい」の理由は多様だったが，インドネシア人学生の場合は，「計画や指導の良さ」（3 人），「十分な交流時間」（2 人），「日本語・文化の学習ができたこと」（2 人）が主にあげられた。質問 7「オンライン海外交流のプログラムの中で何が一番良かったと思いますか」（複数回答）に対する主な回答は，日本人学生は，「自由時間」（2 人），「バリについての知識の獲得」（2 人），「インドネシア人との交流（2 人），インドネシア人学生の場合は，「S 短大の大学案内」（3 人），文化交流・文化の紹介（3 人），情報交流（質疑応答）（2 人）だった。質問 8「オンライン国際交流のプログラムの中で，どんな活動が良くなかったと思いますか」については，回答した 4 人の日本人学生のうち，3 人は「なし」，1 人は「電波」だったのに対して，

インドネシア人学生のうち５人が「インターネット環境の不備」をあげていた。質問９「オンライン交流に積極的に参加しましたか」については，「はい」は，日本人の場合は，４人（80.0％），インドネシア人の場合も，４人(36.4％)だった。「はい」の理由は，日本人学生の場合は，さまざまだったが，インドネシア人学生の場合は，「毎回の参加と日本人学生の質問に答えたこと」（３人）が目立った。最後に，オンライン交流についての全体的な感想（自由記述，複数回答）として，日本人学生は，「オンライン交流の楽しさ」（４人），インドネシア人学生は，「オンライン交流の肯定的な評価」（10 人）とともに，「日本人との直接の交流ができてよかった」（６人），「日本語や日本文化の学習にプラスになったこと」（５人）をあげていた。

Ⅳ. 考察

オンライン国際交流が学生に及ぼす影響を把握するために，日本人学生（ゲスト）とインドネシア人学生（ホスト）の両方に，オンライン交流の前と後に実施したアンケート調査のなかから，表２および表３に提示された「将来的な海外 / 日本での活躍」（事前・事後質問１），「インドネシア人 / 日本人に対するイメージ」（事前・事後質問２），「インドネシア・バリ文化 / 日本文化への興味」（事前・事後質問３），および「（オンライン交流に参加したことによる）自身の変化」（事後質問４：表４参照），そして，「日本人・日本 / インドネシア（バリ）人・インドネシア（バリ）についての見方の変化」（事後質問５：表４参照）を取り上げる。

「将来的な海外 / 日本での活躍」については，「はい」が，日本人学生では，事前の０人から事後では 40％に，インドネシア学生の場合は，事前の約 70％から事後では 80％と多少増えているが，日本人学生の変化が顕著だった。インドネシアの学生は日本語を専攻していることから，当初から日本での活躍を視野に入れていると推察されるが，日本人学生の場合は，オンライン交流を体験したことによる影響と考えらえる。「インドネシア人 / 日本人に対するイメージ」に関しては，「よい」と「ややよい」の合計からみると，日本人学生は，事前では 40％だったが，事後には全員，インドネシア人学生の場合は，事前では全員だったが，事後は約 90％とやや減少した。オンライン交流によって，日本人学生のインドネシアやインドネシア人に対するイメージはよい方向に大きく変化したのに対して，インドネシア人学生の日本や日本人に対するイメージはマイナスの方向にやや変化したことになる。日本人学生の変化の方が大きくみえるのは，インドネシア人学生は，事前調査時点ですでに日本人に対するイメージが高かったのに対して，日本人のインドネシア人に対するイメージが低かったためと考えられる。「インドネシア（バリ）文化 / 日本文化への興味」についても，「ある」と「ややある」という回答を合計すると，日本人学生は，事前では 40％だったが，事後には 100％だった。インドネシア人学生の場合は，事前も事後も約 90％で変化がなかったが，「よい」だけに着目すると，事前は約 55％，事後は約 70％でやや増加していることがわかる。インドネシア人学生の日本人に対するイメージがあまり変わらなかったのは，これまでにすでに日本人学生対象の短期研修プログラムにも参加しているため，日本人との接触を通して，ある程度日本人のイメージがつかんでいたことによると解釈できる。上記３つの質問については，日本とインドネシアの学生を比較すると，日本の学生の方が事前と事後の差が大きく，事後の方が肯定的評価に変化しているといえるだろう。つまり、オンライン交流がインドネシア人学生よりも日本人学生により大きな影響を与えたことになる。これは、インドネシア人学生の場合は、国際的観光地に居住しているため，日本人の行動を日常的に観察する機会があることや，日本語学科の学生であることにより，オンライン交流前に日本・日本人に対する興味や知識がすでにある程度形成されていことの影響と考えられる。

また，「自身の変化」の有無については，日本人学生の全員人が「はい」だったのに対し，インドネシア人学生の場合は，「はい」は約 65％で，日本人学生に変化が大きかった。自由記述によると，変わったことは，日本人学生の場合は，インドネシア（バリ）やバリ人へのイメージの肯定的な変化（肯定感）だったのに対して，インドネシア人学生の場合は，「日本語の学習・習得に関すること」（約 55％）や「日本の大学や文化につ

いての知識と理解の増大」（約 20％）で，日本語学科の学生のため，日本，日本語，日本文化の知識の獲得に重点が置かれていた。「日本・日本人 / インドネシア・インドネシア人（バリ人）についての見方の変化」，すなわち自文化や自国の人についての変化の有無は，日本人学生の場合は，「はい」が 80％だったが，インドネシア人学生の場合は，「はい」が約 55％で，日本人の学生の変化が大きかった。日本人学生があげている「はい」の理由は，多様だったが，たとえば，「日本人のよさがわかった」「バリに似ているところがたくさんある」だった。すでに述べたように、インドネシア人学生は，多様な国の人と交流する機会が多く，自国文化や自国人と比較する作業も頻繁に行われていると考えられるが，日本の学生は，日常的に日本人以外と接触することが少ないため，インドネシア人との交流によって，インドネシア人やインドネシアと日本人や日本を比較する機会を得たことによるインパクトが大きかったと推察される。

総合すると，オンライン国際交流は，参加者（ゲスト）である日本の学生にだけではなく，ホスト国（インドネシア）の学生にも影響を及ぼすが，日本の学生の変化の方がより大きかった。その理由としては，インドネシア人学生は日本語学科の 3 年生であるため，すでに日本文化や日本人についての知識をある程度もっていることが考えられた。また，日本語習得への意識（意欲）が強く，オンライン国際交流への参加動機のひとつであることから（事前質問 4），それ以外の事柄への興味が少なかった可能性もあろう。森山・白田（2010）[2]は国際交流活動に参加することにより，①文化交流による他文化理解と自文化理解，② グループワークによる学び，③ ふり返りによる新たな気づきと自己成長，④ 多言語使用環境と言語スキルの向上の 4 つの成果を上げているし，鈴木・ 他（2020）[9]も海外短期研修による「自身の変化」「日本人についての見方の変化」があることに言及している。本オンライン交流においても，「他文化理解と自文化理解」「新たな気づきと自己成長」が，オンライン上の交流（ある種のグループワークと見なせる）を通じての学びが，参加者側である日本の学生には見られた。また，ホスト側のインドネシアの学生については，「言語（日本語）スキルの向上」もあったように思われる。すなわち，オンライン海外交流であっても，さまざまな工夫によって，対面の国際交流に匹敵する体験ができることが推察される。

次に，アンケート調査結果の質問 6 から質問 9 を取り上げ，今後のオンライン海外交流プログラムを効果的に進めるために必要と考えられる事柄について検討する。

本オンライン国際交流は，S 短大の「異文化理解」および M 大日本語学科の「N3-JLP 対策」（日本語能力試験 N3 準備）の授業の一環であり，全 5 回，基本的に各 90 分で ZOOM を用いて，受講生合計 25 人（日本 5 人，インドネシア 20 人）が参加し，教員による計画・指導によって，原則として日本語で実施された。各回の流れは，開始の挨拶，テーマに関する二発表，および発表に関する双方の学生による質疑応答，自由時間（学生の要望により途中から）だった。オンライン交流の事前と事後に両大学の学生におこなったアンケート調査結果（質問 6 から質問 9）からは，M 大学の受け入れ体制」については，日本人学生の場合は，全員が「よい」，インドネシア人学生の場合は，約65％が「よい」あるいは「ややよい」であり，日本人学生の評価が高かった。インドネシア人の場合は，主に「計画や指導の良さ」，「十分な交流時間」，「日本語・文化の学習ができたこと」が評価されていた。また，プログラムの中で一番良かったこと」に関しては，日本人学生は，「自由時間」，「バリについての知識の獲得」，「インドネシア人との交流」，インドネシア人学生の場合は，「S 短大の大学案内」，文化交流・文化の紹介，情報交流（質疑応答）だった。両学生とも，お互いの文化や知識，交流をあげているが，日本の学生が「自由時間」を挙げていたことは特徴的だった。「プログラムの中で，良くなかったこと」に関しては，両国の学生から，「インターネット環境の不備」があがったが，特にインドネシアの学生に多かった。学校の教室に集まってオンライン交流に参加した日本人学生とは異なり，インドネシア人学生の場合は，各自が自宅等から参加していたので，インターネット環境が多様だったことによると考えられる。また，日本側も場合によっては，画像や音声が乱れることがあった。オンライン交流を円滑に実施するためには，イン

ターネット環境の整備が必要不可である。「オンライン交流への積極的な参加」については，日本の学生の場合は，80%，それに対してインドネシアの学生の場合は参加者の 1/3 弱で，日本の学生の方がより積極的に参加していた。その内容は，日本の学生の場合は，さまざまだったが，インドネシアの学生の場合は，「毎回の参加と日本人学生の質問に答えたこと」（約 30%）が目立った。最後に，オンライン交流についての全体的な感想（自由記述，複数回答）として，日本人学生は，「オンライン交流の楽しさ」（80%），インドネシア人学生は，「オンライン交流の肯定的な評価」（約 90%）とともに，「日本人との直接の交流できてよかった」（約 55%），「日本語や日本文化の学習にプラスになったこと」（約 45%）をあげていた。

以上のことから，オンライン交際交流を円滑に進めるために次の事柄があげられる。

（1）パートナー校同士の特性（メリット）を生かし無理のないオンライン国際交流をおこなうことが重要である。本オンライン交流の場合は，日本語での会話が可能な日本語学科の学生との交流であるため，言語のバリアを解消でき，日本人学生にとっては参加しやすく，よい異文化理解の機会となった。また，インドネシア人学生にとっては，同世代の日本人と実際に直接日本語で話すことによって，自身の日本語を自己評価し、学習動機を促進する貴重な機会になった。なお，インドネシア人学生が日本語を話そうと努力している姿は日本人学生の学習意欲にも肯定的な影響を及ぼしているようだった。

（2）対面の短期海外研修とは異なり，オンライン国際交流の場合は，ホスト側とゲスト側という区別ではなく，より同等な関係での相互交流が望ましい。今回は，M 大がホストとして交流プログラムを進行することになったが，今後は，日本側もゲストとしての参加だけではなく，より積極的にプログラム内容や進行に貢献することによって、双方の学生にとってより良い学習の場を目指さず必要があろう。たとえば、日本人学生による発表、小グループによる共同アクティビティ（中川，2012)[10]; 宇治谷，2013 [11]）などである。

（3）プログラム内容以外に、インターネット環境の整備をはじめ，技術的・実際的な面での丁寧なサポート、およびライブでの交流であるため，担当教員が，状況に応じて，柔軟で臨機応変な対応をすることが必要である。たとえば，機材や ZOOM の使い方などの事前の確認（学生への事前準備やリハーサルなど），両学生の意思疎通が難しい場面におけるチャット機能等による補足説明，学生の要望を適宜組み込むこと（自由交流や学生だけの交流の時間の設定，SNS によるグループの形成など），また進行への配慮（例：適切な時間の管理，学生の役割分担の設定）である。学生の自発的，積極的なアイディアを尊重し，既定のプログラムにあまり固執しない姿勢も重要であろう。

V. まとめと今後の課題と展望

本稿では，オンライン国際交流に参加した学生 16 人（日本人 5 人，インドネシア人 11 人）を対象に，オンライン交流が両国学生に及ぼす影響を探索的に明らかにするために，交流前と交流後にアンケート調査を実施した。また，オンライン海外交流を効果的に進めるために必要な事柄についても検討した。その結果，（1）オンライン国際交流は，参加者（ゲスト）である日本の学生だけではなく，ホスト国（インドネシア）の学生にも影響を及ぼすが，インドネシア人学生は日本語学科の学生であるため日本 / 日本人への知識をすでにある程度習得している上、興味も高いことから、日本人学生への影響がより大きいことが明らかになるとともに、（2）オンライン交流であっても，対面の国際交流に匹敵する体験が可能なことが示唆された。また，オンライン国際交流を円滑に進めるための留意点が提示された。

以下に，本研究の課題や今後の展望について言及する。

（1）本稿は，調査対象者数が少ないため探索的な研究（パイロット・スタディ）である。今後，調査対象者を増やすことによって，本研究成果をさらに明確にする必要がある。

（2）本研究は，アンケート調査によるものだったが，個別 / グループインタビューによって，本研究成果を掘り下げていくことも望まれる。

（3）本研究による成果を今後のオンライン国際交流に生かし，より充実した内容のオンライン国際交流プログラムの作成を目指すことが重要であ

ろう。

謝辞

オンライン国際交流に参加し，本調査にこころよくご協力いただいた両大学の調査参加者に感謝いたします。

引用文献

1) U.S. Department of Education. Evaluation of Evidence-Based Practices in Online Learning: A Meta-Analysis and Review of Online Learning Studies，2010.
2) 森山新・白田千晶，グローバル時代に求められる総合的日本語教育－多文化・多言語サイバーコンソーシアムの成果と可能性 . 2010 世界日本語教育大会（論文集・予稿集），2010，p.1053.0-9.
3) Thorne，S. L. The ‘Intercultural Turn’ and Language Learning in the Crucible of New Media. In F. Helm & S. Guth (eds.) , Telecollaboration 2.0 for Language and Intercultural Learning . Bern: Peter Lang，2010，p.139-164.
4) 関昭典・大瀬朝楓 . コロナ禍におけるオンライン国際学生交流プログラムの考察 . 東京経済大学人文自然科学論集，2021，148，p.113-146.
5) 三原　博光・日高陵好・國定美香・金井秀作 . 大学における短期海外研修を通した国際交流の実践とその効果 . 人間と科学（県立広島大学保健福祉学部誌），2017，17（1），p.59-674.
6) 林千賀・鈴木理恵 . 海外語学短期留学がもたらす効果の持続性 －学生の言語的・情意的側面に見られる変化 . 関東甲信越英語教育学会誌，2017，31，p.15-28.
7) 加藤穣 . 看護系大学における短期海外研修の現状と課題 . 石川看護雑誌，2020，17，p.1–10.
8) 鈴木理恵・林千賀 . 海外語学短期留学の効果 －学生の言語的・情意的側面に見られる変化 . 関東甲信越英語教育学会誌，2014，28，p.83-96.
9) 鈴木一代・ベティ，デボラ，アリトナン・藤田利久 . 短期海外研修が大学生の意識変化に及ぼす影響：バリ島の場合 . 埼玉純真短期大学研究論文集，2020，14，p.31-40.
10) 中川かず子 . 日本人学生と留学生の異文化交流－異文化接触，協働的活動を通した大学教育への適応と意識変容 . ウェブマガジン「留学交流」，2012，13，p.1-10.
11) 宇治谷英子．Impact of Cultural Exchange Programs in Asia. 名古屋外国語大学外国語学部紀要（名古屋外国語大学外国語学部），2013，44，p.123-138.

ABSTRACT

In this paper, a questionnaire survey was conducted on 16 students (5 Japanese and 11 Indonesian) before and after the online international exchange in order to explore the effects of online exchange on the college students in Japan and Indonesia. The results suggested：(1) online international exchange had an impact not only on Japanese students as participants (guests) but also on students in the host country (Indonesia), but the impact on Japanese students was greater; (2) online international exchange could provide college students with the same outcomes as face-to-face international exchange programs. Furthermore, some points to consider for effective online international exchange were presented.

アンケート１(日本人学生用)

「バリ研修に関するアンケート」

アンケート１

　私は、[redacted]です。このたび、国際交流の影響を探ること、また、受け入れ側として受け入れ体制についての評価を伺い、今後、より良い受け入れ体制を提供することを目的として、アンケートを実施することになりました。そのために、「異文化理解」の授業開始時と終了時、バリオンライン研修の事前と事後（予定），　アンケートへのご協力を頂きたく思います。

　なお、個人のプライバシーの保護については十分配慮し、ご迷惑をおかけすることはありません。また、調査目的以外には使用いたしません。

　上記の趣旨をご理解いただき、率直にありのままのお考えをご回答ください。どうぞよろしくお願いいたします。

□まず、あなたのニックネームを右の□に記入してください。　□

※どのようなニックネームでもよいですが、すべてのアンケート（３回予定）に同じニックネームを使用していただきますので、忘れないようにしてください！。

□次の質問の当てはまる回答に〇をつけるか、あるいは、回答を記入してください。

1.　将来海外で活躍したいと思いますか？　　１, はい　　２, どちらでもない　　３, いいえ

２．インドネシア人についてどう思いますか？

１, よい　　２, やや良い　　３, どちらでもない　　４, やや悪い　　５, 悪い

３．インドネシア（バリ）文化について興味ありますか？

１, 興味がある　　２, やや興味がある　　３, 普通　　４, あまり興味がない　　５, 興味がない

４，　バリオンライン研修についてあなたは期待していますか？

１, 期待している　２, 少し期待している　３, どちらでもない　４, あまり期待していない　５, 期待していない

５．４で「期待している」「少し期待している」の場合は, 具体的な内容をあげてください。

_____

_____

□あなたについて

学年　　:　　１年生　　２年生　　３年生　　４年生

性別　　:　　女　　男

海外滞在経験（短期旅行を含む）:　　あり　　なし

「あり」の場合は, どこ_____滞在期間_____

ご協力をありがとうございました。

アンケート２（日本人学生用）

「バリ・オンライン研修に関するアンケート」

アンケート２

私は、[redacted]です。このたび、国際交流の影響を探ること、また、受け入れ側として受け入れ体制についての評価を伺い、今後、より良い受け入れ体制を提供することを目的として、アンケートを実施することになりました。そのために、「異文化理解」の授業開始時と終了時、バリ研修の事前と事後の４回（予定），　アンケートへのご協力を頂きたく思います。

なお、個人のプライバシーの保護については十分配慮し、ご迷惑をおかけすることはありません。また、調査目的以外には使用いたしません。

上記の趣旨をご理解いただき、率直にありのままのお考えをご回答ください。どうぞよろしくお願いいたします。

□前回使用したあなたのニックネームを右の□に記入してください。 [　　]

※忘れた人は名前を記入してください

□次の質問の当てはまる回答に〇をつけるか、あるいは、回答を記入してください。

1.　将来海外で活躍したいと思いますか？　　1, はい　　2, どちらでもない　　3, いいえ

２．インドネシア人についてどう思いますか？

1, よい　　2, やや良い　　3, どちらでもない　　4, やや悪い　　5, 悪い

３．インドネシア文化について興味ありますか？

1, 興味がある　　2, やや興味がある　　3, 普通　　4, あまり興味がない　　5, 興味がない

４，　バリ・オンライン研修に参加してあなた自身に何か変化がありましたか。

１、はい　　２、どちらもない　　３、いいえ

「はい」の場合何が変わりましたか。

_____

_____

５．バリ・オンライン研修に参加して、日本それから日本人についての見方が変わりましたか。

１、はい　　２、どちらもない　　３、いいえ

「はい」の場合何が変わりましたか。

_____

_____

６．マハサラスワティ大学のオンライン研修の受け入れ体制（準備）についてどう思いますか。

１、満足　　２、やや満足　　３、普通　　４、やや不満　　５、不満

なぜか理由を挙げてください。

_____

_____

７．バリ・オンライン研修（交流プログラム）の中で何か一番良かったと思いますか。

_____

_____

８．バリ・オンライン研修（交流プログラム）の中で何が良くなかったと思いますか。

_____

_____

９．あなたは、バリ・オンライン研修（交流中）に、積極的に参加しましたか。

１．はい　　２、どちらでもない　　３．いいえ

「はい」の人は、具体的にはどのようなことですか。

_____

_____

10.　バリ・オンライン研修についての全体的な感想を自由に記述してください。

□あなたについて

学年　　：　　１年生　　２年生

性別　　：　　女　　男

海外滞在経験（短期旅行を含む）：　あり　　なし

「あり」の場合は, どこ_____滞在期間_____

ご協力をありがとうございました。